



Title	〈沈黙〉のオートエスノグラフィー：「サイレント・アイヌ」におけるサバルタン化のプロセスとポストコロニアル状況〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	石原, 真衣
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13279号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72198
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Mai_Ishihara_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 石 原 真 衣

学位論文題名

〈沈黙〉のオートエスノグラフィー

—「サイレント・アイヌ」におけるサバルタン化のプロセスとポストコロニアル状況—

・本論文の観点と方法

現代のアイヌ民族に関する調査研究には、〈アイヌ〉と自らを意識し調査研究に応える用意のある者しか、その視野に入らない限界があった。実際のところ、自らを〈アイヌ〉と意識しない、また意識していたとしても差別をおそれて申告しない人々があり、調査や研究の死角に陥っていることが予測される。本論文では、アイヌと和人の出自をもちながら、自らを〈アイヌ〉とも和人とも意識することができず、民族的な分類体系のはざまに置かれ、発話したとしても既存の分類体系に回収されるために沈黙を強いられる人々を、仮に「サイレント・アイヌ」と名づける。そして、なぜそのような存在が生み出されるのかを明らかにし、「サイレント・アイヌ」が「声」を回復することが可能な状況を展望する。そのために本論では、ポストコロニアルな歴史と、その延長線上にある現在において、不可視な存在となっている「私」の存在をオートエスノグラフィーの方法論によって描く。それと共に通時的な家族の歴史と「私」を取り巻く共時的な社会構造を分析する。また海外の先住民研究では、先住民の置かれている現在の状況が植民地主義的状況において構築されているという前提から、「脱植民地化」がキーワードとして設定される。本論文ではこれも踏まえ、北海道における「サイレント・アイヌ」に即して考察する。つまり本論文では、なぜ、アイヌの出自を持つ「私」が、自己の存在を説明する言葉を失い、社会的な透明人間と化してしまうのか当事者にとって切実な問いを、エスニシティやアイデンティティといった理論的視点からではなく、植民地主義的な過去からつらなる現在をたどり直し、現在を構成する歴史の作用を解きほぐすことによって明らかにし、その位置から脱植民地化の方向を照らし出すことを試みる。

・本論文の内容

以上で述べた研究設問とその背景を第1章で説明した後に、第2章では理論的枠組みを概観する。本論の理論的な枠組みは、他者表象を植民地主義的な状況を踏まえて批判的に分析するポストコロニアル論およびポストモダン的人类学的理論である。特にガヤトリ・スピヴァクによるサバルタン論を参照し、さらにそれを社会人類学的な社会構造論および分類理論を接合する。サバルタン論の「語る」と「聞く」という発話に関する議論を批判的に継承・発展させる試みとして、いかに、ある主体が声を失っていくのかというサバルタン化のプロセスにここでは焦点を当てる。そのために、人類学理論の基礎ともなっており、人間の認識や知覚に大きく影響する「分類」に着目する。人間は分類することで世界を見ることができる。しかし、ある分類体系の構築は、そこからもれ落ちる存在を必然的に生み出すことになり、それらは穢れや混沌として危険視されてきた。「私」の存在がサバルタン化されるプロセスを社会構造との関連で考える上で、分類理論における「異例なもの（アノマリー）」の概念は特に重要である。

第3章では、従来の他者表象に内在する死角を乗り越える試みとして、オートエスノグラフィーの方法論を用いる。人類学が研究営為の中核に据えてきたエスノグラフィーという手法やプロセスは、これまで主として「描く側／描かれる側」という二分法を基礎としていた。しかし、これでは、描く側にとって不可視である存在は扱われなかったり、あるいは誤解されたまま既知の存在に対するネガティブな像として描かれてしまったりすることがある。その限界を乗り越えるために、従来のエスノグラフィー論を批判的に継承し、近年日本で発展している当事者研究と、オートエスノグラフィー論を結びつける新たな方法論を提示する。

第4章では、近現代のアイヌ民族の自己表象について、主として北海道アイヌ協会の出版物を手がかりに論じる。アイヌ民族は、明治の開拓使設置以降、臣民化を志向し、第二次世界大戦後は、GHQなどと

の接触の後、異民族であると主張を始め、世界的なブラックパワーや公民権運動に後押しされる形で、「少数民族」、「先住民族」としての自己主張を展開した。現在、アイヌ民族が「先住民」という自己像をもつに至っているが、それは国内外のアイヌ民族を取り巻く多様なアクターの影響関係において成り立っている。先住民に関する議論を主導してきた国連などの国際機関や、国内の行政機関もまた「アイヌ民族」という表象を構築するために一定の役割を果たしている。

第5章では、第4章までの議論を踏まえ、「私」の家族4世代の物語を歴史化する。世代を超えて続く「縦と横の分断」は、具体的に私たちへどのような影響を及ぼしたのか。名もなき人々が生きた歴史とはどのようなものであったのか。家族4世代にわたる物語を通時的に紡ぐことで、何が継承され、何が断絶されたのかについて、考察することが可能となる。具体的な個々の事例を、マクロな歴史的社会的文脈に位置づけながら分析する。

第6章では「サイレント・アイヌ」の事例である「私」という存在に、オートエスノグラフィーの方法論によって光を当てていく。そこから見えてくるのは分断がもたらす〈痛み〉である。アイヌであることの継承が忌避される世代間の分断と、アイヌ出自のカミングアウトが抑圧される同世代内での分断、植民地状況下におけるこの縦と横の分断が働き合い、社会的な透明人間としての「サイレント・アイヌ」が生み出される。それは社会構造から疎外されたサバルタン性を帯びた存在である。このはざまに陥った人間が、沈黙を破って自らの存在について語ることを試みても、既存の「アイヌ民族」や「アイヌ文化」、あるいは「アイデンティティ」といったカテゴリーに当てはめられ、どこにも属さないという存在のあり方が受容されることはない。その結果、「サイレント・アイヌ」は二度目の沈黙に陥らざるを得ない。このように「私」が認識されないのは、社会的に自明な分類体系にとって「異例なもの」だからである。しかしこの位置には、ターナーが「コミュニタス」概念で示唆したような、既存の社会構造を逆照射する批判力と、さまざまな分断をつなぎ直す創造性が宿っている。この意味で「サイレント・アイヌ」とはこれまでとは違う社会のあり様へと潜在的に開かれた、過渡的なカテゴリーである。

第7章の結論では、「私」はなぜ透明人間で、なぜ、人々は私の語りを了承しないのかという序論での問いに立ち返り、これまで述べてきた北海道のポストコロニアル状況、縦と横の分断がもたらす沈黙、痛みの記憶と〈声〉の喪失、サバルタンと異例なるものといった概念を用い、その問いを説明し得る枠組みを提示する。「サイレント・アイヌ」は植民地状況が生み落とした存在であると共に、そこにつらなる〈痛み〉の物語を丹念に辿ってみるならば、これまで不可視化されてきた多様な他者たちの人間としての姿を浮かび上がらせる場でもある。それは植民地主義的な他者表象の鋳型を取り外し、関係性の脱植民地化を進めていく可能性の場であるともいえる。